慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	支那革命史, 吉野作造 加藤繁共著
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1923
Jtitle	史学 Vol.2, No.3 (1923. 5) ,p.153(459)- 155(461)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19230500-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

汪輝祖の吏治齋家に關する著述を輯錄した『汪龍莊遺書』には種々の刻本があつて同治元年に江寧布政使吳棠の輯刻した望三益齋本や同十年に楊蓉塘が正譌訂悞の上之を重刊したものや、光緒十五年に江蘇書局が望三益齋本を撫刻したものや種々流布して居る。今正譌訂悞の楊蓉塘重刻本を繙くに『夢痕錄餘』三十一枚の表に頭註があつて是書悉照盱眙吳氏刊本。而此處文氣不貫。必有脫誤。俟覓得原本。再行補刊と記してあつて、是は三十枚の裏二行目の七月初二日から九行目の便道歸省までが字句に多少の相違はあるが三十一枚の表九行目から裏の七行目までに繰返されて居る爲で本文に錯簡のある事は之を疑ふの餘地がない。江蘇書局本も楊氏重刻本に據つたと見えて本文には何等の訂正を加へず、頭註迄もその儘に轉載してある。但頭註を增補として更に又案。自方輿紀要起。至戒之勉之一段。似屬前頁家書中語。七月起至歸省。又與上重沓。姑仍之坿記。以待補正と書き添えて稍や錯簡に對して校訂者の所見を加へてある。併しこれらの通行本によつては到底訂譌の途がなかつたのである。

然るに近頃同治十一年に汪輝祖の孫世金が重刊した『夢痕錄餘』の家刻本を寓目する事が出來たが、是に由れば通行本の三十枚裏の末二行の如きは全く竄入で削除し去る可きものであり三十枚の表の十行目から裏の十行目までは正に下の如く改む可きで、思ふに最新刊の江蘇書局本は既に改訂せられて居るのであらうが改訂以前の通行本を所持せらる讀者の便を圖りて茲に十一行丈け抄出して置く。

沾沾以詞章角勝。吾鄉魏文靖之勳德。自遠在毛西河文章上也。手書數百言貽之。遂進兒輩而語之曰 國家養士。始庠序以至詞垣。敎之甚備。原期收得人之用爲之。士者束髮受書父兄。即望其以功名自効。乃或高談古昔。自矜淹雅。於時務一無通曉。小試之民社。敎養不知。大界之封疆。緩急失據。所讀何書。是誰之過。汝曹當求志之時。冀策名之會。均宜重自期許。安身立命。勿務名。勿躁進。學則根柢經史。厚樹本原。熟讀資治通鑑。文獻通考。以知古。博覽大清會典。直省通志。以知今。旁及天下郡國利病書。

（田中萃一郎）

支那革命史（吉野作造 加藤繁共著）

融和は理解から生れる。世界平和、民族聯盟と云ふ名は美しいが、さて地球上の雜多な諸民族は歷史傳統敎養の程度が何れも千差萬別である。之等の諸民族が相互の正しい理解を缺いた場合どうして意志感情の疏隔、ひいては爭鬪不和の將來を防止することが出來やうか。日本と支那は年來の友國であり、その版圖も接近しておる。近世に於ける日本の勃興は對岸の支那に多大の衝動を與へた。日淸戰爭は戊戌政變の因となり、日露戰爭は憲政運動、革命黨成立の端となつた。然も革命戰爭の際ともすれば淸廷を擁護せんとする氣振りを示し革命黨に不利益な影響を與へたのも亦

我日本政府であつた。今日日支の間にわだかまる面白からざる暗雲を見るにつけ、吾人は爲政者が隣邦支那の諸般の事情殊にその民族性に對する理解に缺けたる點ありしことを痛感するのである。然しながら既往は咎むべからず、吾人は嚴に將來を戒心しなければならぬ。

今日の支那の混沌たる政情は何時安定に歸すべしとも思はれぬ狀態にあるが、數千年の歷史數億の民衆を有する大國が古き形骸を捨てゝ新たなる組織に移らむとする大なる改造運動の過程にありと見れば同情の念を禁じえないのである。然して現在支那政情を了解するには吾人は新支那樹立の運動が其端を發したる宣統三年の革命に遡らればならぬ。當年の事情を取扱へる史書としては吾人は先に吉野博士の「支那革命小史」を有してゐた。然もその簡なるを嘆じてゐたが今や同博士及び加藤繁教授の共著として「支那革命史」なる好著が公判せられたことは欣喜に堪へざる所である。

本書筆を孫逸仙とその祕密結社興中會に起し戊戌政變、惠州事件、中國革命同盟會、雲南事件、安徽砲隊事件、廣東督署襲擊等を叙して革命前記を終り、ついで革命本記には武昌の變、各省の獨立、漢陽、南京の攻陷、媾和會議、大清皇帝の退位、孫文の退職と臨時政府の北京移轉等を說いてゐる。

吉野博士の序文によれば博士は最初文獻を渉獵する協力者として市村博士の紹介にて加藤教授と事業を共にする事となり、次いで教授の方針が博士のそれと一致するをもつて一切の材料を呈供し、本書全體の執筆を同教授に委託したのだといふ。一言一句を苟くせざる質實なる著者の史風は篇中到る處に閃き、亂麻の如き當年の政局は極めて手際よく按排せられてゐる。殊に篇中まゝ革命の生んだ悲壯なる挿話を點綴し、爆彈を抱き總督衙門を爆破し官吏二十余人を斃し、國に殉じた可憐なる十八の少年史堅如（六七頁）や、病苦をしのび炸彈を懷き、小銃を手挾み、喇叭を吹いて眞先に立ち、「吾等は皆漢人、自ら相殘殺すべきにあらず」と叫んで敵の進軍する面前に立ち、其彈丸に仆れた青年林文（一六〇頁）の最後等悲壯なる場面は目に見る如く畫き出され、一讀卷を掩ふに忍びない。

著者の意見に從へば革命運動は之を三期に別つことが出來る。第一期は孫文が興中會を組織した光緒十八年（明治廿五年）より拳匪事變の起つた光緒廿六年（明治卅三年）までゞあり、當時清朝の權威猶ほ旺であつて、革命運動に對し世間は小數の青年の外一顧をも與へなかつた。第二期は光緒廿六年より中國同盟會の組織せられた光緒卅一年（明治卅八年）に至るまでゞ拳匪事變は清朝の事を共にするに足らざることを天下の識者に覺らしめ、革命運動は爾來各方面各地方の人士に同情され加擔され、運動の性質は地方的黨派的より次第に國民的たらんとする傾向を帶びてきた。第三期は光緒卅一年より宣統三年（明治四十四年）に至る間であつて、光緒卅年より卅一年に至つて行はれた日露戰爭は彼等をして益々母國の危急を憂へしめ、留學生は益々增加し、革命運動は一日千丈の勢をもつて發展し、宣統三年武昌に烽火あがるや全國直に響應する壯觀を見るに至つたのである。清朝沒落の原因は清朝が外來民族たりしことゝ、彼等が支那を統治する實力を失墜したこと

ゝの二つに歸せられる。清朝を覆し民族的獨立を恢復することは兎も角も成功したが、革命の最終目的たる國家國民の再造復活と云ふ大事業は、空しく挫折し失敗した。之は革命黨が袁世凱と妥協し彼に大總統の榮職を與へしにその端を發する。袁を總統とすることは此の姦物に共和政治破壞の機會を與へるのみならず、彼を圍繞する清朝以來の官僚と弊風陋俗とをして依然勢力を逞しうせしめる所以であつた云々。

著者の言の如く「民族の獨立」「國家の改造」を標語として起つた革命運動が、前者の實現に成功して後者の遂行に挫折した事情は悲しむべきであるが、かくの如き大事業は一朝一夕にして完成なし得べきものではあるまい。兎に角這般の革命は支那民族の特色たりしその舊式國家觀を葬り去り、外國輸入の新國家組織を樹立した支那政治史上の大變動であり、近世支那國民の遭遇したる一大政治的試練であつた。此重要なる一場面が如何なる俳優により如何にして演出されたか。その經緯を縱橫に叙し來つた此「支那革命史」の一卷は種々なる意味に於て支那研究上の好個の資料である。吾人は之によつて隣邦新人が如何なる熱情をもつて支那改造の運動にたづさはりしかを知ることが出來る。支那人の國民性が此大事件を通じて如何に發輝せられたかを窺ふことが出來る。歷史家も政治家も教育家も實業家も本篇を通じて無限の教訓を汲みとり、將來に對する指針を樹立することが出來やう。要するに本書は苟しくも隣邦支那の事情を論ずるものゝ是非一本を机上に備ふべき良著であり、吾人は此貴重な述作を學界に呈供されし著者の勞苦に對し感謝に堪へぬものである。

（松本信廣）

A Short History of British Commonwealth 2vols. by Ramsay Muir

マンチエスター大學近世史教授であつた著者は、數年前 The Culmination of Modern History 三册（I. Nationalism and Internationalism, II. National Self-government, III. The Expansion of Europe）を著はして、歷史家として奈何に造詣の深い學者であるかと云ふことを示した。本書は Short History と冠してあるけれど、上下二册何れも菊版八百頁に餘る大册である。有名なるグリーンの大英國民史（Short History of English People）も、グリーン夫人の增補を加算すれば千頁に餘る決して Short でない大作であるが、是れは其れ以上に Short でない大作である。併し大作必ずしも傑作ではない。ポラード教授が家庭大學叢書の一に加へた英國史は、菊版半折貳百五十頁の小册子であるけれど、同叢書中遙に傑出した名著たるを失はない。ミュアー氏の A short History of the British Commonwealth は大作であるが、同時に傑作であるか什麼か。

法制とか、文學とか、藝術とか、若くは社會及び經濟とか、特殊の方面を取扱つた歷史は別として、政治を中心とした一般の英國歷史に關するスタンダード チルク だけでも、今や枚擧するに遑ない程である。フリーマンやグリーンやヒユームやフロードやマコーレーやレツキーの各時代に關する歷史は、今日では寧ろクラシツクスとして尊重す可きものが多い。最近二十年の間にも、